

# 本願寺史料研究所報

第五号

発行所  
本願寺史料研究所

〒六〇〇 京都市下京区七条大宮上ル  
龍谷大学大宮学舎図書館内

電話 ○七五一三四三一三三一一  
内線 (四一二二)

発行人 所長 千葉乗隆  
発行日 一九九二年八月三一日

## 『真宗重宝聚英』 その後の新発見をめぐつて

平松令三

にちがいない。北は盛岡から西は島根県まで、今に残る光明本尊のほとんど全部を実査させていただいた。その成果が『真宗重宝聚英』第二巻（以下『聚英』と略称する）で、今にして思うと実につたない報告であつたが、それまで真宗史の中で最も光のあたらなかつた部分に、僅かながらメスを入れることができたことだけは評価してもらえるのではないか、とひそかに自負している。

## 光明本尊の新発見二本

先年、千葉乗隆先生ご指導のもとに、「信仰の造形的表現研究委員会」が発足し、その研究成果が『真宗重宝聚英』全十巻となつて、同朋舎から刊行された。こうした秀れた真宗美術作品を最新のカラー印刷によつて網羅的に集録したのは、これまでに全くなかつたところで、真宗美術史の研究には比類なく大きな基盤となるものであつた。

小生は幸いにもこの委員会の末席に加えていただき、数年間にわたつて調査と研究をさせていただいた。生涯に二度とない機会にめぐり会えたのは何とも幸運であつた。光明本尊の研究などは、こんな機会でなければ不可能だつた

『聚英』でとりあげた光明本尊は全部で六十六本であつたが、そのうち一本が発見された。この紙面をお借りして、それを報告し、『聚英』第二巻を補足させていただくことにする。

滋賀県近江八幡市浅小井町 仏性寺（仏光寺派）蔵

絹本着色 縦一四二・〇センチ 横一〇〇・〇センチ  
掛幅装

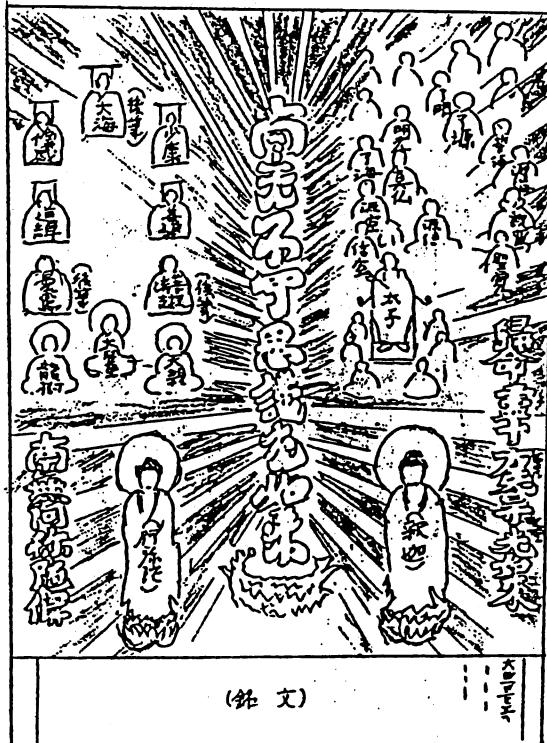
光明条数三十八本。天竺震旦高僧の札銘を、菩提流支と雲鸞とを相互に入れ替え、法照を「大海」と改めている。後世の仕業らしいが、何故かわからない。

聖徳太子とその侍臣六人については通規の通り。

和朝（日本）の先徳は十九人で、AA型の配置。ただし、明光と了源以降の先徳の札銘が、仏光寺歴代上人名に改竄されている。おそらく江戸時代の仕業であろう。賛銘は、天部のものを欠失する。地部の賛銘は「必得超絶去・・・」の文が見えないだけで、他は通規のもの。

製作年代は室町初期（十五世紀初葉）だろう。先年近江八幡市の文化財に指定された。

図A 近江八幡市 仏性寺本 光明本尊



神戸市長田区西尻池町四丁目 高福寺（仏光寺派）蔵  
絹本着色 縦一四二・五センチ 横九七・三センチ

#### 掛幅装

光明条数三十六本らしい。天竺震旦部と太子侍臣部は通規の通り。和朝先徳は十五人で、AA型配置になつていて、了源系らしいが、札銘の剥落が著しく、名を読みとるのが困難。なお最上部の一人は後世に描き込まれたもの。

天の賛銘は欠失。地の賛銘は仏性寺本に同じ。地色は白色とする。墨書に存覚の筆癖をとり入れた風が見られるのが注目される。

人物の描写が写実的で、南北朝期（十四世紀後半）に製作されたものと認められる。所蔵する高福寺は室町中期の開基と伝えられるので、どこからか伝来したものと思われるが、それについての伝承はない。

図B 神戸市 高福寺本 光明本尊



この一本の光明本尊は貴重な作品であるが、造形的表现

研究委員会でその存在を存知しなかつたために、『聚英』に漏れたのは残念だった。しかし今後もこのようない新発見があるだろうし、もし御存知の向があつたら、ぜひ御教示ねがいたい。光明本尊の研究をより充実させるために。

### 名号本尊と先徳像

大阪府大東市野崎 専応寺（本願寺派）蔵  
絹本着色 縦九七・八センチ 横三八・一センチ  
掛幅装

大東市の歴史民俗資料館が、専応寺（住職は前京都女子大学教授手塚唯聰氏）の宝物を中心にして、「中世大東の歴史と信仰」という特別展を開催することになり、当研究所へその協力を依頼してきた。そこで昭和六十三年十月、翌平成元年三月に行われた展観に発見されたもの。もちろんカラー図版により大きく収載された。

図C 大東市 専応寺本



〔日本源空上人〕

この画と似た形式の六字名号と先徳像は、広島県三次市照林坊（本派）に、「連座名号」という名で伝えられているものがある。『聚英』第一巻（一五八・九頁）に収載されている。「南無阿弥陀仏」が画面上半分の中央にあつて、光明がそこから降りそぞろように描かれている。その降りそぞろような光明の形がこの専応寺本と全く同様なので、専応寺でこれを拝見したとき、まずそれを思い出したのであつた。

画面中央上部寄りに六字名号があつて、それを蓮台が受けている。その名号から発する光明（四十四条か）は、下方に向つて降りそぞろような形で、その光明の中に四人の僧の姿がある。それぞれに銘札があつて、「日本源空上人」「親鸞上人」「釈唯信」「比丘尼照信」と読める。寺伝によると、唯信は当寺の開基で、親鸞面授の直弟、二十四輩の一人。照信はその妻で、当寺第二世という。

画面下端に贊銘部があつて、白地一色の中に、次の二十一句が十行に墨書きされている。

光明遍照、十方世界、念佛衆生、攝取不捨

（觀無量壽經 真身觀の文）

彼仏今現、在世成仏、當知本誓、重願不虛、衆生稱念、必得往生  
(往生禮讚の文)  
如來本誓、一毫無謂、願佛決定、引接於我、稱念無疑、  
往生安樂

(出典不明、御存知の方は教えていただきたい)  
極重悪人、無他方便、唯稱念佛、得生極樂

(往生要集 卷下、大文第八の文)

しかし『聚英』の写真を改めて見直してみると、左右に並んでいる人物が、法然・親鸞から始まって、十四人もあららしい。「らしい」というのは、破損が著しくて、明確でないところがあるからである。もちろん銘札の文字は失われていて判読できず、法然と親鸞とが像容からそれと判別できるに過ぎない。その法然・親鸞が最上段だから、人物は上から下へ、という並び方ということになり、専応寺本が下から上へ、なのと反対である。その点でこの両本は、互いに関係がありそうには思われない。光明の形がよく似ている、というだけのことらしい。

ことのついでに両本を比較してみると、親鸞が、照林坊本では礼盤の上に坐っているのに對して、専応寺本は上げ畳に坐っている。坐具などの付属品は「簡略なものほど古式」という原則を適用すると、専応寺本の方が古態ということになる。しかし画の描法を見ると、両本はともに十四世紀の製作ではあるが、照林坊本の描法は写実的で生気があり、専応寺本よりも古いように思われる。ただ照林坊本は破損が甚しいので、十分な検討ができる点で割り引かねばならない。

六字名号と先徳像はもう一幅、福井市秘鍵寺（本派）のものが『聚英』第一巻に収載されている。しかしこれは名号が画面中央にあって、光明は四方へ放射するような形だから、専応寺本・照林坊本の降りそぞような光明ではない。そのために関連がすぐには思い浮かばなかつたのであつた。しかし先徳像が四人である点は、専応寺本と同じである。一応関連を検討してみる必要があろう。そこで銘札を見ると、「愚禿親鸞」「釈真仏」「釈順信」

「釈顕智」となつてゐる。真仏・順信・顕智は言うまでもなく初期関東教団の重鎮である。そんな重鎮が並んでいるところに、何か大きな意味を感じられて、『聚英』の解説にはそんな趣旨で筆を執つたのであつた。

しかし今にして思うと、真仏・顕智はともに高田門徒であるが、順信は鹿島門徒のリーダーであつて、全く別のグループである。それが真仏と顕智の間に割り込んでいたのに先ず疑問が湧く。「愚禿親鸞」という書き方も新しさを思わせるし、法然が見えないのも、中世的でない。しかも四人が等間隔で階段状に、上から下へ配置されている点、何か形骸化の臭いが強く、果して古い伝統が存するのかどうか、やはり問題のようである。

『聚英』第一巻には、更にもう一点、堺市宝光寺に蔵される名号本尊を収載している。これは九字名号を中心にして、その両脇に龍樹・天親以下法然までの七高僧と親鸞とで八人の像を配したものである。これは九字名号である点にやや古風さを感じるが、七高僧と親鸞という余りにも著名な高僧だけが選ばれていて、点に問題があり、少くとも専応寺本との関連はありそうにない。

要するに専応寺本については、関連のありそうな作例を見出しができないでいる。何か祖型があつたに違いないと思うのだけれども、それが発見されていない。今後もつと調査を進めることによつてそれを握まえてみたいものである。

その点で次の作品については、いささか冒険ながら一つの見通しが立つように思われる。それを報告させていただきたい。

## 阿弥陀と太子および和朝先徳像

岡山県川上郡備中町布賀 光伝寺（本願寺派）蔵

絹本着色 縦一三六・〇センチ 横五五・三センチ  
掛幅装

千葉先生のお伴をして、本願寺史料研究所の方々と一緒に光伝寺へおうかがいしたのは、平成三年十一月十三日のことであった。伯備線の備中高梁駅からタクシーで、相当西方へ入った山あいのお寺であった。「存覚上人筆の光明品が所蔵されている」という記事が、吉岡五郎男さんという方の著書に記されていて、その本に掲載されている写真を見たところ、珍らしい形式らしいので、調査に出かけたことになつたのであつた。参上して拝見すると、予想に違わず、これまでに全く知られていない珍らしい図様で、しかも製作年代も相当地に遡りそうなので、一同欣喜雀躍した。

図D 岡山県 光伝寺本



この図は、上部に真正面開きの阿弥陀如来像（來迎印の立像）を中心にして、その左右両側に八人づつ計十六人の僧形坐像を各一列に配置し、下部には聖徳太子像を中心に、

六人の侍臣を描いている。各像にはそれぞれ銘札がついているのだが、剥落と褪色が甚しく、向って左側最下段の椅子に腰かける像が「日本源空□人」と判読できるのみである。そのほかは像容によつて、向つて右側最下段が源信（恵心僧都）、その上が首に帽子を巻いた親鸞と判別できる。従つてこれら十六人は「和朝先徳」といわれる人々であることはまちがいない。

聖徳太子の方は、袈裟を着け両手で柄香炉を持つていて、古来十六歳孝養像と言われる姿であるが、頭髪を束ねて胸前で下げ、背屏のついた台上に立つていて、宮崎圓遵先生によつて「垂髪太子」と名付けられた形である。その太子をとりかこむようにして六人の侍臣が坐つてゐるが、これが向つて右上より小野妹子大臣・蘇我馬子大臣・聖人日羅・高麗法師惠慈・阿佐太子・博士学寄であることは言うまでもない。この種の図ではお馴染みの人々である。

太子像の左右両脇に色紙型がある。左右とも地色によつてそれぞれ上下二段に分ち、それに贊銘が墨書きされている。墨書きは剥落がひどいが、残つてゐる文字をたどつてみると、上段が源信伝（『存覚袖日記』第一項に、「恵心文」として収載されているもの）、下段が聖徳太子御廟銅函銘（同じ『袖日記』第一項に「太子文」として収載されているもの）であることがわかる。その筆跡は太子侍臣の札銘墨書きと同筆と認められる。

そこでこの図の問題点であるが、それは何と言つても、阿弥陀如来が主尊のように描かれているところにある。この種の図で、阿弥陀如来を加えたもの、とくに阿弥陀を主尊とした図は、これまでの知見には全くない。従つて『聚

英』にも一点も収載されていない。だからこれを拝見して大いに喜んだのであった。

この図から阿弥陀を除いた形の図だったら、そう珍らしくはない。『聚英』第八巻に「和朝（日本）太子先徳連坐像」という分類で掲載している三十六例の大部分がそれである。和朝先徳の人数はいろいろまちまちだし、その並び方も光伝寺本のように整列したものは少ないが、下から上へという順番であることに変りはないし、太子と侍臣の配置も同様だし（侍臣は四人のこともある）、左右の贊文もほとんど共通している。天地に銘帯を設けて贊銘を書いているものが多いのにに対して、光伝寺本にはそれがないが、これは光伝寺本にも元はあつたのを、破損のため修理時に切り捨ててしまつたのかもしれない。そんな例は他にもいくつかあるから、これは余り気にしなくてもいいだろう。

ところでこの図のような形は、右の連坐像以外にも見られる。それは『聚英』第二巻全体に収載した光明本尊の向つて右側の部分である。会津光照寺本のように、太子像を右側は概ねこの形だからである（実は聖観・信空の配置の問題もあるが、いまはこれを度外視しておきたい。本筋には関係がないように思われるから）。研究者によつては、天竺震旦高僧連坐像と、このような形の和朝太子先徳連坐像とを、光明本尊がバラバラに分解して生まれたもの、とする御意見もあるらしい。しかしそれはやはり本末顛倒といふべきで、むしろそれらの連坐像を組み合せて光明本尊が案出されたに違ひない、と私は考へていて、その何よりの証拠は、『聚英』第二巻に掲げた岡崎市妙

源寺本の光明本尊である。この本が絵の描法その他から現存する光明本尊の中でダントツの最古作品であることはまちがいないが、これは名号（九字）と、天竺震旦高僧連坐像と、和朝太子先徳連坐像とがそれぞれ別幅で、三幅からなっている。このため宮崎圓遵先生はこれを光明本尊とは認められなかつたようであるが、少くともこの三幅が一具（一揃）であることは、その描法や銘札・贊銘の筆跡などから、一見しただけで明白である。そしてこの三幅を並べて懸けると、通規の光明本尊の形態に極めて近いこともまた明白である。従つて光明本尊と呼ぶ呼ばないは別として、これが光明本尊の先駆的な形態であるとすることについては、誰方も問題はあるまい。私はこれが光明本尊の原初的作品と信じている。そしてその製作年代を、銘札や贊銘の筆跡が親鸞の高弟で親鸞より五年前に示寂した真仏に比定できることから、親鸞の晩年ころまで遡らせたい、と考えている。仮りに真仏云々を脇へのけておくとしても、その制作年代が鎌倉時代中期に近いことは、恐らく多くの学者のご賛同をいただいているのではなかろうか。

つまりこの妙源寺本のように、名号と連坐像と、もとは別々であつたものを組み合せ、それに他の名号や釈迦弥陀二尊などを加えてでき上つたのが光明本尊と考えたい。

この点については、他にいろいろの論拠も挙げる必要があるが、今は一つの事象を擧げるに留めたい。それは一幅本のほとんどの光明本尊は、贊銘は天地に色紙型に記されているだけで、画面の中には贊銘の色紙型を作らないことである。ところが太子先徳連坐像では、ほとんどが太子と先徳との境界あたりに光伝寺本のように色紙型を作つて、

源信伝と銅函銘の贊銘を墨書しているのだが、通例の光明本尊では、三幅の妙源寺本にはあっても、他の光明本尊からはほとんど姿を消していることである。どうしてかその理由は明らかではないが、天竺震旦高僧の連坐像には色紙型というような日本的なものは存在しなかった（天竺震旦高僧像は、重源将来と伝える「淨土五祖像」のように海外からの舶載品が祖型と考えられる）ために、それとのバランスから撤去されたことが考えられる。光明本尊が数多く製作された十四世紀・十五世紀には、单幅の太子先徳連坐像も数多く作られて今に伝えられているが、連坐像にはこの色紙型がそのまま配置されて贊銘が書かれているのに、光明本尊に組み込まれた連坐像にそれが消えたのは、省略退化によるものと考えざるを得ないからである。

### 光伝寺本の製作年代と寺伝

最後に問題となるのは、この光伝寺本を真宗美術史の中へどう位置づけるかである。それにはまずこの画の製作年代を決めてからねばならないが、大づかみに言つて、十四世紀、つまり鎌倉末期から南北朝期のころ、とすることは一見して容易である。使用されている織目の荒い絵絹がまずそれを物語る。

更に画面を仔細に眺めて行くと、いろんな特徴に気がつく。その一つは太子像の像容である。光明本尊を調査して得た経験によると、十四世紀末から十五世紀前半ごろの記年銘がある光明本尊の太子像は、六一七歳かと思われるような幼童形をとることが多いのだが、この光明本尊の太子

像は成人した少年の姿である。しかも着用している袍には大きな鶴丸文があちこちに配置されている。こういう鶴丸文は室町期に入つた像にはほとんど見ることがない。木彫の太子像でも鎌倉南北朝のものに多い文様である。

また阿弥陀如来も、この画の像はまことに個性的である。全体のプロポーションは頭部が過大で、鎌倉時代の写実性から遠ざかりつつあるのかのように見えるが、その相貌を見ると額が広く、頬がよく締まつた、顎のあたりに丸味があり、鎌倉時代の慈愛味が失われていない。衲衣に麻の葉つなぎや雷文つなぎを主とした文様の銀泥彩色があるが、柔軟な線で精緻に描かれている。

以上の特徴を綜合すると、この画の製作年代は十四世紀前半ごろ、とするのが妥当な線ではあるまい。ただ付記しておかねばならないのは、後世の補彩が目立つことである。阿弥陀から放たれる光明や、銘札の輪廓、太子の背屏の線などが、太く直線的な截金なので、薰染の著しい画面の中でそれだけがドギツく光つて見えるが、これは江戸時代も後半期の下手くそな補彩であつて、これに気をとられると、この画の価値を見誤ることになるので、その点のご注意が肝要であろう。

ところで当寺には、この画の製作年代に関しても興味ある伝承がある。それは本願寺覚如の長子で、才智抜群で知られた存覚が、備中備後を巡錫した際、当寺へ滞在し、この画を描いた、といふのである。吉岡五郎男氏の著書にはその年を「暦応三年」と記されているが、存覚が備後へ来て國府で法花宗と対決した事実は、「存覚一期記」暦応元年の条に現われてゐるので、暦応元年（一二三八）の誤りで

あろう。もちろん『一期記』に光伝寺の名は見えないが、この画の製作年代がこの寺伝とほぼ一致する点から、これは十分に視野の中へ入れておかねばなるまい。また画は口の絵師の手にかかる作品であることは言うまでもないから、「存覚が描いた」とはちょっと言い過ぎで、おそらく存覚と仲の良かつた京都祇園社絵所の絵師に描かせた、というほどの意味にとつておくべきであろう。

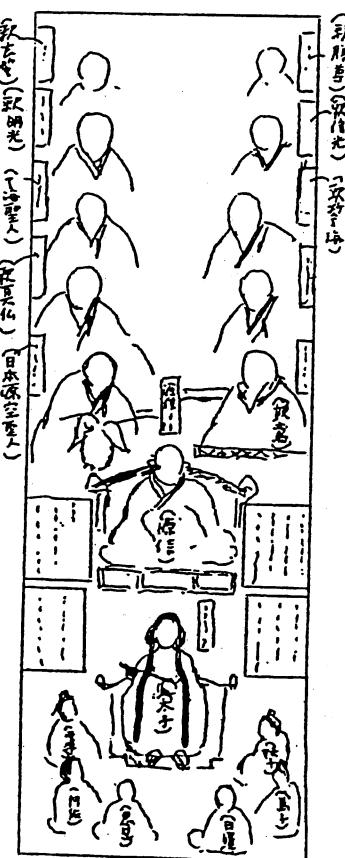
### 光伝寺本の評価と美術史上の意義

そこでこの阿弥陀を主尊とする連坐像の形式であるが、上述のようにわずかにこの一例しか現存していない。しかしそれは過去にはもつと多く存したのに、そのほとんどが消滅して、たまたまこの一点だけが残ったのだ、と考えられないでもないが、私はその反対のことを考えている。いささか突鼻に聞えるかもしれないが、これは『聚英』第八巻に三十六例もとり上げられた和朝太子先徳連坐像形式を一部改造して阿弥陀像を加えた実験的な試作品だったのではないか、というのである。

その第一の理由は、この図に描かれた恵心僧都源信の位置とその像容にある。先に図示したように、源信は向つて右側の先徳像の中の最下段にあって、しかも真正面を向いて坐つている。他の先徳像はすべて阿弥陀の方向、つまり内側に顔を向ける坐り方なのに、ひとり源信だけはそちらを向かず、真正面を向いているのである。わざと仲間はずれになつているような、どうも不自然な像容である。なぜ源信ひとりがこうなつているのか、といふと、その

謎は和朝太子先徳連坐像を眺めることによつて、解明の緒口が見出されそうである。この先徳連坐像をしらべてみると、三十六例のうち一例は源信を描いていないので、これは該当しないものとする、残り三十五例のすべてが、源信は図の中央部にあつて、正面向きに坐つてしているのである。一つの例外もない。

図E 広島県常石 宝田院本 太子先徳連坐像



画工だったら、源信の位置を変更したときに、像の向きも他の先徳と同じように内側へ向かせたかもしれない。しかしこの画工は頭の硬い男だったので、製作依頼の命によつて像の位置を動かしただけだったので、それまでの約束に従つて像は正面向きに描いたのではないか、とも思われるが、あるいは像の向きはそんなに簡単に変更することができぬものだつたのかもしれない。

いずれにせよ光伝寺本は従来の連坐像を一部改造して製作したものと考えられるが、なぜそんな改造が必要だつたのか、というと、これは阿弥陀如来を中心据えたかったからであろうことは、もう言うまでもあるまい。従来の連坐像では、脇役ばかりが並んだ図だから、それだけでは礼拝の対象とはなり得ない。そこで阿弥陀を主尊に据えることによつて、礼拝の本尊とすることができる、という意図だつたのであるまい。もちろんそのためには、名号を中心据えてもよいのは当然であるが、ここで名号ではないに、阿弥陀如来像が選ばれたのは、光明本尊とは異つた独自のものを作ろうとする意欲によるものだつたとも考えられる。しかしそれは教義面にも大きくかかわる問題であるから、私どき者が軽々に論じるべきものではあるまい。

### 考え方られる存覚創案の新形式

ではいつたい、そんなことを思いつき、画工に命じてこれを描かせたのは誰か。もちろん証拠があるわけではないが、一つ思いあたることがあるので、それを提示して、諸賢の御批判を得たい。その人物というのは、先にも述べた

ような、当寺の縁起にも登場する人物、本願寺覺如の長男でありながら、余りにも鋭い才能の持主であつたがためか、父から勘当を受け、本願寺の後継者にならなかつた男、存覚その人である。

私は曾つて絵系図の成立を論じた際に（拙稿「絵系図の成立について」『仏教史学研究』第二四巻第一号・昭和五六年、そのほか『聚英』第十巻総説「絵系図」）、真宗初期教団を風靡した絵系図の創案者は存覚だつた、と断じた。それは単なる憶測ではなく、若干の史料に基づくものであつた。それに対して今回は特段の史料がある訳ではなく、寺伝と噛み合せただけの推測に過ぎない。しかも存覚には、自分が見聞したり、銘文を書いたりした本尊や連坐像の類をメモした自筆ノート『存覚袖日記』が残されているが、その中には新しい図様の画を描かせた、というような記述は一例もない。従つて「柳の下にドジョウはいない」と言われるかもしれない。しかしながら『袖日記』は、父覺如が示寂した存覚六十二歳（その前年、父との最終和解が成立している）あたり以降の記録と見られ、彼が最も活動的であった四十歳代、五十歳代に較べると、あの意欲的な積極性は少し影をひそめているらしいことを視野の中に入れ、存覚がかかわつたと見られる真宗美術作品を点検してみると、一つの興味ある事実が浮び上つてくる。それは備後国（広島県沼隈郡）山南光照寺に伝えられる法然絵伝三幅と親鸞絵伝一幅とである。法然絵伝は『聚英』第六巻に、親鸞絵伝は同第四巻に収載したので、詳細はそれを御覧いただきたいが、この四幅はともに存覚が自筆をもつて札銘と裏書きとを書いている。裏書きによると、画工は隆円で、建

武五年（一二三二八）に山南光照寺の什物として制作されたものである。建武五年、即ち暦応元年は存覚四十九歳で、『存覚一期記』によると、備後国へ下り、國府において法花宗と対決し、それに勝つたことが知られるところから、この絵伝四幅の制作には存覚が大きく関与していったであろうことはもはや明白である。

そこでこの絵伝、とくに親鸞絵伝を見ると、その図柄にいくつか特異な点が見られる。言うまでもなく親鸞の生涯を描いた伝記絵は、永仁三年（一二九五）覚如によつて制作されたのが初稿本で、その後何度も改訂が行われたのであるが、この山南光照寺本は伝絵諸本のうちの初稿本に依拠して制作されたことは、諸般の状況から明白となつてゐる。ところが、各段の図様については初稿本とも異なる点があるのである。もちろん他の諸本とも異つてゐる。一例をあげると、信行両座段において、伝絵では法然を座敷の奥へ正面に向いて坐らせ、その右側に聖覚・信空・親鸞を配し、それに対座する形で僧尼の群集を描くのが、初稿本以下諸本の図様であるが、光照寺本では法然の前に親鸞が坐つて、筆をとつて紙に書きつけている以外は、みな思い思ひの向きで坐つてゐるだけで、「両座」に別れた形になつていはない。またこの場面での名物男である熊谷蓮生坊がアタフタと駆けつけてくる姿もない。

こんな大きな図柄の変化は、画工の自由裁量範囲を遙かに越えたものである。制作者（プロデューサー）の指図以外には考へられない。となると札銘から裏書まで筆を振つた存覚の存在が大きく浮かび上つてくる。またこのころ、こんな点について指図し得る能力を持つた人物は、存覚を

措いてほかにはあり得ない。彼の仕業に相違ない。

そうしてみると、少くともこのころ彼はこのような「信仰の造形的表現」について、深い関心を持っており、自分の意志で積極的に関与しようとしていた、と考えられる。それは何か新しいものを作ろうとする意欲であり、その後、『諸神本懐集』を始め多くの著述を制作したこととも無関係ではあるまい。

以上のように考えてくると、備後国に隣接する地にあって、年代的に存覚と矛盾しない作品で、しかもそれまでの真宗教團に行われていた連坐像とは一味ちがつた構成のこの光伝寺本が、存覚の指導による新作品である可能性は否定できないのではないか。新しい「信仰の造形的表現」を求めての彼の意欲の表われであつたと言つてそうまちがいではあるまい。あるいは彼の実験的試作品であつたのかかもしれない。というのはいまのところこれに引き続く作品が作られた形跡が見当らないからである。それはその後の存覚が、父覚如との和解工作もつたりして、異端児と思われるような行動を自粛したらしいことと関連するのかも知れない。

☆ ☆ ☆ ☆ ☆

#### 《編集後記》

前号で梅雨前と予告していましたが、平松令三先生のおかけをもちまして、ようやくお届けすることが出来ます。御体調が充分でなかつたにもかかわらず、無理を押して執筆・校正をして頂いた平松先生にお礼申し上げます。次号の予告をしても、実現できる保証はありませんが、十月を考へております。（左右田）